一ぼれい　秡餌鳥の餌をすかして内をとゝのふ　一サフラン　氣血をめぐらし内調也　一箱根草　熱をさまし、餌をおし、万病によし、　一弟切草　翅をゑぼりあしく足の不叶よし　一熊の膽　諸鳥目病ニ大妙藥　一遠志　諸鳥の病によし　一古き壁の土　羽に油のいでたるに用て妙也　一鱈の油　羽に虫の出來たるに功有也　一火取雀　肉の落たるに用、功能有、　一海老釣虫　一柳虫　一はだか虫　一米虫　一綿虫但わたの實の内ゟ出る赤きいろのむし　一青葉虫但し青葉を合せ、其内にある虫、いろもあかし、　一蚓

右虫の類、此外にも鳥に見せ好む虫ならば、病鳥は勿論、平生にも用てよし、甲のある虫并長く生じたる虫は不宜、就中鰹節に出來候毛虫、且又甲虫別而毒也、

放鳥

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年二月庚戌朔、聖躬不豫、甲寅、御病殊劇、〇中略放諸鷹犬及籠鳥、唯留鸚鵡、

〔白石紳書二〕一新太郎少將〇池田光政ある時、春秋傳をよまれしが、魯の君十九にして童心有といへる所にて申されしは、我身に甚だ耻しき事有、唐鳥やうの類、翫び計りにして、無益の物は丈夫の心を養ふべきものにあらず、是亦童心をまぬかれざる也とて、悉く鳥をはなち、翫びものを捨られしとぞ、

〔續近世叢語五規箴〕河野恕齋事蓮池侯、爲大坂邸守、聞侯有籠鳥之玩、曰、不樂和諧自然之音、而悅號哭悲哀之聲、用此而助興、用此而侑酒、其忍不亦已甚乎、夫以樂號哭悲哀之心而臨群黎、其能有不忍人之政乎、玩好之事、至微也、至細也、然由微而致大、自細以致巨、履霜之漸、實可懼焉、作樊禽賦以諷、侯覽而悅之、立命破樊籠、

樊禽賦曰、夫何小禽之衆多、分羽毛以各有儀、育蒼莽而逍遙、擇園池焉追隨、啄秋實之垂纍、弄春葩之委蕤、飲不過滿腹、安寧踰一枝、交柯茂陰平林、迤邐屬和熙之良辰、樂烟景之已美、離厥音織柳條以遷徙、喈喈其鳴、搶芳樹而決起、爰群爰友、載飛載止、稟和樂之攸洽、豈絲桐之可擬、爾乃設網羅、陳罝罘、駭之掩之、擊之俘之、籠之絡之、收而拘之、飾雕籠以居之、繅彩絲以紆之、絕侶何慘、離群何孤、誠生意之不存、豈香餌之便無、延頸以悲號、斂羽翼而哀呼、目睽睽分其疑懼、瞿瞿分其懷戚、樊籠豈不煥分、桎梏何益、纆條豈不絢分、束縛甚厄、振羽無地、運身安適、思莊生於步啄、悲林公之鎖翮、